



Japan Society of  
Youth and Adolescent Psychology  
*Newsletter*

第 65 号 2014 年 9 月 4 日  
発行：日本青年心理学会事務局

## ■目次

### <特集：青年期の終わり>

大野 久：愛することと働くこと

信太寿理：砂嵐をくぐりぬけたとき ―海辺のカフカから―

田中健夫：終わりがあるという体験がもたらすもの

千島雄太：青年が青年でなくなるということ

山本誠一：「青年期の終わり」について考える観点

### <書評：私のこの一冊>

中間玲子：『不干斎ハビアン思想―キリシタンの教えと日本的心性の相克―』

家島明彦：『Narrative Development in Adolescence: Creating the Storied Self』

### <広報>

事務局からのお知らせ

## <特集> 青年期の終わり

成人期への通過儀礼が形骸化する昨今、青年期と成人期の明確な区分は困難になっています。最近では、「ポスト青年期」のような発達段階が設定されるなど、青年期から成人期への移行過程を再考する試みがしばしばなされています。そこで本特集では、そうした移行過程を理解する一視点として「青年期の終わり」に注目し、「青年期の終わり」をいかに捉えることが可能か、個人的な体験としてどのように迎えたかなど、立場の異なる会員の方々にご寄稿いただきました。「青年期の終わり」について、会員の皆様のご一考の機会となれば幸いです。ご執筆いただいた会員の方々、ありがとうございました。(担当：杉本英晴・小沢一仁)

### 愛することと働くこと

大野 久（立教大学現代心理学研究科教授）

青年期はいつ終わるのかについて、言い換えると、心理学的な大人になることの定義は何かを考える場合、フロイトの「人生において大事なことは何か」という質問への答え「愛することと働くこと」が大きなヒントの1つになる。特に、フロイトの孫弟子であるエリクソンの漸成発達理論の第5段階青年期の発達主題がアイデンティティ、第6段階の初期成人期の活力が愛、第7段階の成人期の発達主題が生殖性（世代継承性）であることと考え合わせると以下のように考えることができる。

青年期までの関心の中心は自分がいかに社会の中で（職業以外も含め）働き、居場所を見つけ、生きがいを感じ、人生を意味あるものにするかであり、そのことが一段

落すると関心は他者を愛することに移っていき、次世代（子供や弟子や後輩）と次世代に残す物（文字通り仕事による生産物から文化、思想など形のないものまで）を作り上げ、自分が生きてきた証を実体化することに関心が移っていく。つまり、社会の中で自分の果たす役割への「自覚、自信、自尊心、責任感、使命感、生きがい感」として表現されるアイデンティティを見つけ（少なくとも社会に出てから3年から5年かかるけれど）、さらに恋愛や結婚、子育て、また職業、社会活動としての他者との関わりの中で関心が自分自身から人の幸せへと移行していくことが1つの青年期の終わりだと考えている。

ちなみに筆者は、青年期、まだ十分に愛の段階に至らない状態で異性との交際を始めた場合の相手からの賞賛、評価を自分のアイデンティティの拠り所にする現象を「アイデンティティのための恋愛」（大野, 1995, 2010）と名付けている。

---

---

### 砂嵐をくぐりぬけたとき ―海辺のカフカから―

信太寿理（三重大学非常勤講師）

講義中に実施するレポートでは、学生からプライベートな感想を寄せられることも多い。彼らは恋愛に悩み、友情に悩み、将来に悩み、自分について悩み、悩んでいることに悩む。ときには悩まないことに悩む。彼らはまさに青年期の中にいるように思う。

村上春樹著、「海辺のカフカ」において、このような部分がある。「ある場合には運命ってというのは、絶えまなく進行方向を変える局地的な砂嵐に似ている。君はそれを避けようと足どりを変える。そうすると、嵐も君にあわせるように足どりを変える。・・・（中略）・・・その嵐はどこか遠くからやってきた無関係ななにかじゃないからだ。そいつはつまり、君自身のことなんだ。君の中にあるなにかなんだ。」

思い返してみれば、私も彼らくらいの頃、多くのことに悩み、そして、悩み苦しむ時間が終わることを望んでいたように思う。それはまるで、砂嵐のようであったかも知れない。

今回頂いた「青年期の終わり」というテーマについて、自分がいつ青年期の終わりを迎えたのかを考えてみたが、気がついた時には終わっていたような気がする。いくつかのライフイベントやきっかけはあるかも知れないが、それでもいつ終わったとはっきりとは認識していない。

同書において、このような部分が続く。「そしてその砂嵐が終わったとき、どうやって自分がそいつをくぐり抜けて生きのびることができたのか、君には理解できないはずだ。いやほんとうにそいつがさってしまったのかどうかもたしかじゃないはずだ。でもひとつだけはっきりしていることがある。その嵐から出てきた君は、そこに足を踏み入れたときの君じゃないっていうことだ。」

海辺のカフカの主人公も、様々な人に出会い、色々なものに導かれ、そして自分自身の決意をもってその砂嵐を歩いてゆく。その砂嵐をくぐりぬけた時、主人公も確かに変化していることに気がつく。

今まさに「砂嵐の中」にいる青年達を見ると、少し懐かしいような気持ちになり、そして心からエールを送りたくなる。そしてくぐりぬけた者からすると、その時は返ってこないものであり、砂嵐の中で色々なことを感じ、経験してほしいと思うのであろう。

---

---

## 終わりがあるという体験がもたらすもの

田中健夫（東京女子大学）

ここでは、終わりがある人間関係や場に青年が入っていくことの意味について書いてみたい。

イギリス公立の心理治療機関であるタヴィストック・クリニックには、YPCS (Young People's Consultation Service) という、青年自身による申込み self-referral を受けつける無料の相談サービスがある。対象年齢は、親の同意が要らない 16 歳から、上限は 30 歳まで。面接回数は最大が 4 回であり、カンファレンスに出たり相談事例を読んでいると、起承転結があるかのように面接は展開していく。機が熟し、自ら求めて来談したときに、専門家とともに考える心的空間 space が提供されることそのものが“変容の器”となるのは印象的だ。大人への移行の難しさの内実が面接者との関係性のなかにヴィヴィッドに再現され、なぞられながら、依存と自立(自律)にまつわる主題が探索されていく。

このシステムを青年がうまく利用できるのは、対話の相手が i) 専門家ではあるが権威から自由で、ii) 青年自身によって見出されたものであること、そして iii) “終わり”が最初から折り込まれている関係であることによる。終わりがあるからこそ安心して身をゆだねられる、というのはよくわかる気がする。“何かを断念するとはどういうことか”という喪失の苦痛が、言語にまとまらない揺れの体験が過渡的な対象に投げかけられる。自分自身を振り返っても、終わりがある中での自由な探索の場（大学教養部での寮生活や、離職後の期限を決めての仕事など）が 10～20 代の私には必要だった。

ちなみに、タヴィストックの思春期・青年期部門 adolescent department は、最近合理化のもとで成人部門に統合され、1961 年開始という長い歴史をもつこの相談サービスの上限年齢は 25 歳までと短縮された。何があったのかの詳細は知らないが、スタッフが共有している文化はむしろ“子どもと家庭部門”のほうに近かった。若者が模索をする機会が狭まっているのは日本だけではないかもしれず、危機感と寂しさを感じている。

---

---

## 青年が青年でなくなるということ

千島雄太（筑波大学大学院人間総合科学研究科  
・日本学術振興会特別研員）

昨年、福島で行われた日本青年心理学会第 21 回大会では、研究委員会企画シンポジウムにおいて、僭越ながら指定討論をさせていただいた。若輩者にこのような機会を与えていただいたことに、この場を借りて感謝申し上げたい。本稿では、その内容や個人としての経験を踏まえて、青年期の終わりについて、再考してみたい。

今回、研究者を対象に研究委員会が行った調査では、25 歳や 30 歳が青年期の終わり

であるという回答が多く見られた。また、近年海外で使用されることの多い **Emerging Adulthood** (Arnett, 2000) は 18 歳から 29 歳くらいを指し、青年期でも成人前期でもない時期とされている。年齢区分の違いはあれど、「大人になれない（またはならない）青年」に着目していることは共通しているといえる。そのような青年の特徴として、経済的に自立していない、心理的に成熟していない、就職をしていない、結婚をしていないなど、様々な説明が可能である。〇〇が起これば青年期は終わるということを、一義的に決められないところが面白さであるように思う。

その意味では、青年期の終わりに関しては、量的データで結論を出すというよりも、個人の人生経験の記述や面接などから、質的に一人一人が大人になっていく様を描く方が向いているのだろう。例えば、白井（2010）では、30 歳の女性が自分を大人と思えないことに着目し、縦断的に面接を行っている。個人の置かれている環境や主観的な問題も含めて、多角的に検討することが、「青年期はいつ終わるのか」という問いへの有効なアプローチであろう。

私自身に関して言えば、現在大学院生でありながら、非常勤講師や研究員としても勤めており、青年かどうかの狭間にいると思っている。私にとっては、職業や社会的責任ということが青年期の終わりにとって重要なものかもしれない。青年として内なる声に耳を傾けて青年心理学を研究できる幸せを噛みしめつつ、大人としての責任を果たさなければと日々感じている。

Arnett, J. J. (2000). Emerging adulthood: A theory of development from the late teens through the twenties. *American Psychologist*, 55, 469-480.

白井利明（2010）. 30 歳の女性はなぜ自分を大人と思わないのか—縦断的研究— 大阪教育大学紀要 第 4 部門 教育科学, 58, 77-87

---

---

### 「青年期の終わり」について考える観点

山本誠一（立正大学）

「青年期の終わり」について考え始めたとき、「青年期」或いは「青年」という概念が、実は極めて難しいテーマだということを改めて実感させられた。まず「青年期の終わり」を考えると、次の 2 通りの観点が想定できる。①客観的・社会的な観点から、生物学的な暦年齢（例えば 25・26 歳頃や 30 歳）や社会地位的なもの（就職、結婚、親になる）を中心に観る見方、②その人の内面や生活体験のあり方という主観的・心理的・実存的な観点から、アイデンティティ形成や個性化（C.G ユング<sup>6</sup>による）等に関連する不安、自己嫌悪、とらわれ、自己変容(成長)への衝迫性や苦悩等を中心に観る見方である。さらに上記観点に加え、(a)人が自分自身のこととして「青年期」について思うのか、(b)他者の「青年期」について思うのか、という自他の観点も「青年期の終わり」を扱うとき、重要な観点であろう。なおこれらの観点は、西平(1990)の「青年」理解の世代性・青年性・個別性の考えとも関連する観点とも言える。また当然上記観点の①と②は相互に関係し、(a)と(b)も関係する。さらに①と(b)や、②と(a)も互に関連するものである。さて私自身が「青年期の終わり」を内省したとき、上記の観点の②・(a)の観点から捉えたときが、最も実感をもって納得しやすいのである。つまり様々な青年期心性の中でも、特に「その人に布置した個性化の過程を、ときに神経症というあり方やときに創造的行為というあり方で、その苦悩からも逃げられず自己と直面させられ、余裕なく生きざるを得ない」ような心理的な状態から、良かれ悪しかれ、自分自身がより楽に自由になれた或いは外

へ出たと、認知実感したときが、その人にとっての「青年期の終わり」だと考えるのである。もちろんこの後にも、さらなるアイデンティティ形成や、個性化過程、その苦悩が、同様に続いていく人は少なくないが、青年期のそれとは、どこか本質的に異なるのではないか、と思われるのである。

---

---

＜書評：私のこの一冊＞

『不干斎ハビアン思想—キリシタンの教えと日本的心性の相克—』

梶田叡一(2014) 創元社

中間玲子 (兵庫教育大学大学院教育学研究科)

不干斎ハビアンは、16 世紀後半から 17 世紀はじめの時代を生きた人である。ヨーロッパとの交易が盛んだったこの時代、ハビアンは 19 歳の時に入信し、キリシタンとなった。イエズス会の中等教育および高等教育を受け修道士となった彼は、著述家・説教師・弁舌家としての才能を発揮し、指導者的役割を担うようになる。キリスト教への禁圧が強まる後半期においても、キリシタン側の代表的知識人として活躍する。

ところが 45 歳の時、ハビアンは出奔し、棄教する。特段の外的な圧迫や迫害はなかったという。彼の棄教をどう理解すればよいのか。著者の問題意識はここにある。この問いに対し、著者は、ハビアンの精神世界の変容過程を検討するという方法をとる。そして、彼の棄教は、旧来の日本人と同じ伝統的な精神世界に立ち返ったということではなく、キリシタンの精神世界を通過することによって、従来の多くの日本人とは異なる新たな思想を持つに至ったことを意味すると著者は推測する。従来の精神世界を棄ててキリスト教に入信し、キリスト教を棄てることで、真に自立した人間に近づいていくというスパイラルな人格発達過程である。そしてこの過程が促された背景に、キリスト教が日本人の心の奥底に与える強い違和感を想定し、日本独自の精神世界のあり方について洞察を深める。さらには、ハビアンがなぜそれを乗り越えられなかったのかを自己意識の在りようから検討し、現代社会に通じる問題としての議論も展開している。

自己やアイデンティティの研究には文化の問題がつきまとう。それは、文化比較という形で容易に理解しうるものではない。自分たちにとっての「自己」「アイデンティティ」という言葉の意味を、生活の中で、生きる中で、真に理解しようとする努力を要するものである。そのような問題意識を持つ者にとっては、胸を借りたという読後感をもたらしてくれる一冊である。

---

---

＜書評：私のこの一冊＞

『Narrative Development in Adolescence:  
Creating the Storied Self』

Kate C. McLean & Monisha Pasupathi (2009) Springer

家島明彦 (大阪大学 教育学習支援センター)

本書は、「青年期のナラティブ・アイデンティティ」や「青年期の語りと発達の関連」について学ぶための良書である。全 11 章で構成されており、青年期とナラティブに関する多様なテーマを扱っている。

著者は、アメリカ、カナダ、ドイツ、ニュージーランドなど世界各国から集まった総勢 30 名の研究者で、博士号取得前の大学院生から、学校現場で 20 年クラス担任や管理職を務めた教師、100 冊以上の著作を持つベテラン研究者にいたるまで、バラエティに富んでいる。

内容は、発達的変化を超えて繰り返し語られる自己の一貫性 (1 章)、幼児期からの語りが年齢や文化を超えてウェルビーイングに影響する可能性 (2 章)、青年期における家族との対話の重要性 (3 章)、親や友人との対話とアイデンティティや自律性の関連 (4 章)、祖父母に関する語りとアイデンティティ発達の関連 (5 章)、非行少年のライフストーリー (6 章)、非行少年予備軍のライフストーリーの語り直し (7 章)、レジリエンスとの関連 (8 章)、コラージュ技法との関連 (9 章)、道徳発達との関連 (10 章)、戦争の中で育った青年による批判的な語り (旧ユーゴスラビアの事例研究) (11 章) などである。

本書が明らかにしたことは、ナラティブ・アイデンティティや語りによって創られる自己が青年期にとって非常に重要であり、青年期における語りの危険性と有用性に関して、多くの研究が進んでいる、ということである。様々な視点から「青年期×ナラティブ×発達」に切り込んでおり、非常に示唆に富む内容ばかりである。また、英語での語りデータの引用方法、表やグラフでのまとめ方、インタビュー調査への入り方(教示文)、なども学ぶことができるので、これから英語で調査し、英語で論文を書こうとする人にとっては、テクニカルな面でも勉強になるかもしれない。

多様な執筆者が多様なテーマを取り扱っている本書を、多様な読者に読んでもらいたい。

---

---

## <広報>

### 事務局からのお知らせ

#### I. 白紙の会費納入伝票が届いています

2014 年 3 月 5 日付で摂津正雀の郵便局から 2013 年度の年会費 (正会員) 7,500 円を納入した伝票が事務局に届きましたが、住所・氏名欄が白紙になっています。これでは納入処理ができませんので、思い当たる方は至急事務局へご連絡ください。

#### II. 会員ホームページのリンク

日本青年心理学会ホームページ (<http://www.gakkai.ac/jsyap/>) の「学会の紹介」タブの最後に、「会員のホームページ」の欄があります。掲載をご希望の方は、事務局 (seinenshinri@gmail.com) までメールで連絡をください。

(記入例) 山田花子会員 (〇〇大学) のホームページ  
青年期・進路指導の紹介、論文紹介など

#### III. 会員異動

#### IV. 送付先不明の方のお名前

日本青年心理学会事務局  
The Japan Society of Youth and Adolescent Psychology  
〒606-8501 京都市左京区吉田二本松町  
京都大学高等教育研究開発推進センター 溝上研究室  
TEL : 075-753-3047  
E-mail : seinenshinri@gmail.com  
Homepage : <http://wwwsoc.nii.ac.jp/jsyap/>  
振替口座 : 00940-6-273417  
口座名称 : 日本青年心理学会

お問合せはできるだけ E-mail でお願い致します。